

「積極的平和主義」

2015年04月18日

キリスト教の月刊誌『福音と世界』の5月号は「教会と憲法、人権と平和」の特集号を組んでいる。ホーリネス教団・中山キリスト教会の牧師・河野克也牧師が「新約聖書のパシフィスト・ヴィジョン—聖書的『積極的平和主義』を目指して」と題して寄稿している。

日本国憲法の「平和主義」はパシフィズム (pacifism) で、紛争解決・問題解決の手段として暴力に訴えないことを信条としている。安倍政権の主張する「積極的平和主義」はプロアクティブ・コントリビューション・トゥー・ピース (proactive contribution to peace) で、パシフィズムではない。安倍政権の安全保障政策は、日米同盟の強化・自衛隊の米軍補助部隊化を推し進めるもので、集団的自衛権行使、防衛装備移転三原則など、多国軍参加への解禁に明らかなように、軍事力の行使を中核としているからである。ヨハン・ガルトゥングは、平和の概念を下記のように提唱している。戦争のない状態を「消極的平和」と言い、「積極的平和 (ポジティブ・ピース)」は構造的暴力、すなわち社会構造の中に不平等な力関係、経済的搾取、貧困、格差、政治的抑圧、差別、植民地主義などがない状態を指す。安倍政権は「積極的平和」への貢献を謳っているようだが、軍事面での積極的貢献を進めようとする政策はポジティブ・ピースとは言えない。軍事力を基盤にした「積極的平和主義」は、言葉上からも偽りであるということである。

そして、新約聖書学者のリチャード・ヘイズの言葉を要約している。「すべての創造者であるイスラエルの神は、… 失われ破れた世界を、イエスの十字架と復活を通して救出する行動を起こしてくださった。この救出の全体像はいまだ明らかにされていないが、神はその良き知らせのために証言者の共同体、すなわち教会を創造された。教会は、そのストーリーの壮大な終末を待ち望む間、聖霊によって力づけられて、イエス・キリストの愛の従順を再現し、またそうすることで、この世界に対する神の贖いの目的を示すしるしとなるように招かれている。」教会の使命について、本当に励まされる言葉である。

ドイツのメルケル首相が7年ぶりに来日した。メルケル首相は「ホロコーストの時代があったにもかかわらずドイツが国際社会に受け入れられたのは、一つにはドイツが過去ときちんと向き合ったからだ」と語っている。従軍慰安婦問題は過去を踏まえてきちんと解決を、と繰り返したら、安倍首相が最後に「内政干渉だ」と怒り出したという。また、メルケル首相は原発問題に関して「考えを変えたのは、日本という高度な技術水準を持つ国で起きた福島原発事故だった。本当に予測不能なリスクがある。だから多くの同僚たちと共に脱原発、そして別のエネルギー制度を築く、という決定を下した」と語った。メルケル首相の言葉は安倍首相には届かず、反応は否定的であった。ドイツのメディアは安倍政権の歴史修正主義と原発再稼働の方針を厳しい口調で報じているという。

日本は「世界報道自由度ランキング」で、2010年には11位であったが、2015年には61位に下落している。外国から見ると、閉ざされた、不自由な国になっていると写る。メディアが権力になびいていることは確かで、批判的な言動は抑え込まれている。

ブラジルの小井沼眞樹子宣教師から、開口一番「日本はどうなっているの。統一地方選挙は自民党が勝ったようですね。」という電話が来た。私は「やり切れません」と答えるしかなかった。投票率は50%を切っている。政治不信は現政権を強めていく。

ヘイズが書いているように、神によって創造された教会は主イエスの十字架と復活による救出の良き知らせを、終末を待ち望みながら、真剣に証言することが求められている。